

## 雌阿寒岳, 中マチネシリ噴火期Iにおける火砕噴火推移の特質

### Characteristic Eruption Sequence at the Main Stage of Nakamachineshiri in the Me-Akan Volcano, Eastern Hokkaido

安齋 圭亮<sup>1</sup>, 和田 恵治<sup>1\*</sup>

ANZAI, Keisuke<sup>1</sup>, WADA, Keiji<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 北海道教育大学旭川校

<sup>1</sup>Hokkaido University of Education

北海道東部の阿寒カルデラに位置する活火山・雌阿寒岳は近年小規模な水蒸気爆発を頻発させている。約13000年前に雌阿寒岳では最も大規模な噴火が起こった(中マチネシリ噴火期I, Nak-I と呼称する)。Nak-I は、軽石に富む火砕流が先行し溶岩が噴出した初期噴火ステージ(Nak-I-E)と、溶岩破碎を伴う火砕流噴火を経て軽石・スコリア破片が共存する火砕流そしてプリニー式噴火・火砕流噴出に至る主要期噴火ステージ(Nak-I-M)に分けられる。本発表では、雌阿寒岳の東山麓、雌阿寒川沿いの露頭観察と火山噴出物の解析から、Nak-I-Mにおける噴火推移の特質とそのマグマ供給系について考察を行ったので、その結果を報告する。

Nak-I-M は、下位から溶岩岩片を多量に含むスコリア質火砕流(M1~M7)、軽石・スコリア火砕流(M8)、降下軽石・スコリア(M9)、軽石・スコリア火砕流(M10)、降下軽石・スコリア(M11)、火砕サージ・降下火山灰(M12)の順に時間間隙なく重なり、さらに脱ガスパイプがこれらの層を貫くため、M1~M12は短期間に起こった一連の噴火イベントによる堆積物だと考えられる。

M1~M7はフラグメントに富む層とマトリックスに富む層がペアとなって7層が重なる。溶岩岩片は不均質であり、それらは安山岩マグマとデイサイトマグマが混合して噴出した初期噴火ステージの溶岩破片である。その溶岩内部はガスを含んで高温状態であった。そこに玄武岩質安山岩マグマが繰り返し上昇し、溶岩を破壊すると同時に、それらの破片を伴って本質スコリアやアグルチネート破片をもつ火砕流として流下した。

M8以降の噴火ではデイサイトマグマと玄武岩質安山岩マグマの混合が必ず起こって噴火に至る。M7の噴火から時間を隔てずにデイサイトマグマ溜りの供給系に活動場所が移動したと考えられる。M8からM12の噴火は、火砕流噴火からプリニー式噴火へと噴火推移のサイクルが認められる。大まかには発泡度が高まっていく噴火経緯であったこと、プリニー式噴火と火砕流噴火の同時性が推定されるなど、規模の大きな爆発的マグマ噴火の推移として今までの典型的な一輪噴火の推移とは異なり、「雌阿寒型噴火推移」と仮称できる特徴があることがわかった。

キーワード: 雌阿寒岳, 中マチネシリ, 噴火推移, 火砕流

Keywords: Me-akan volcano, Nakamachineshiri, eruption sequence, pyroclastic flow